



# キャンパスを飛び出して

## インターンシップ・ボランティア体験談

この大学が出来て四年目。それぞれ大学の中で学んだこともたくさんあると思いますが、今日は大学の外でいろいろな経験をされてきたみなさんに、実際にどのような影響があったか、聞きたいと思います。

### ●大学の外の世界を体験

**柳原** 国立公園の管理をしているレンジャーという環境省の仕事があり、そのお手伝いをするサブレンジャーを体験しました。夏の間、学生を募って、山に登ってゴミ拾いをしたり、宿舎でスライドを使って山の説明をしたり、観察会を行ったりします。山井先生のゼミでレポートを書いたのがきっかけで、野生動物の調査にも参加し、その時にサブレンジャーを知りました。岩手にもあるということだったので、二週間、秋田駒ヶ岳に行ってみました。なだらかなお花が咲いた山で危険は特にないのですが、二週間、一日も休みなしで体力的に辛かったです。

**佐藤** 僕は、テレビ局の報道部に四週間はどお世話になりました。記者と現場に行き、実際に取材し、帰って原稿を書いて添削していただきました。撮ってきた映像を実際に編集してそれがニュースで使われて、楽しかったですね。社員を対象にした記者講習やカメラ講習にも参加させてもらったので、すごく得をしたという思いです。

**佐藤** 去年もインターンシップに行きましたね。  
**柳原** 去年は衛星のアンテナを設置する横浜の会社に四週間は行ってきました。

**阿部** 一日もなしで……!  
**柳原** 朝は観望会、昼は山に登って、帰ってきてスライドの上映、そして宿舎の血洗いという

### 聞き手 (五十音順)



阿部晃士 (専任講師)



矢追真司 (3年) (やおい・しんじ)



岩泉美奈子 (3年) (いわいずみ・みなこ)



佐藤泰貴 (3年) (さとう・やすたか)



柳原千穂 (4年) (やなぎはら・ちほ)



佐野嘉彦 (助手)

**岩泉** 私がインターンシップを経験したのは東京のコンサルティング会社です。期間は大体三週間。大学で紹介されるインターンシップとはちがうというところですが、自分で探して行った会社は実践型。実際自分が一つの会社の市場調査、マーケ

### ●実践型のインターンシップ

ティングを担当して、ヒアリングやデータ調べをするんです。本当に自分の力以上のことが求められたという感じが、分勉強になりました。

**阿部** 総合政策学部で様々な分野の勉強をしていることが、何か役に立つことはなかったですか。  
**柳原** サブレンや野生動物の調査では、どうしても生態だけでは解明できない問題があるので、ちょっと視点を変えて考えることが必要だと感じる部分がたくさんあり、総合政策学部で学んでいることは有効だと思いました。もしそこで専門性が必要と感じるなら専門人がそこから切り込んでいけばいい。

**阿部** 矢追君は多治見市役所で実際にどんなことをやってきましたか?  
**矢追** 「文化と人権の課」。企画部の中にあつて、男女共同参画、子どもの人権、国際交流に関わっています。僕は国際交流に関わりたいので、いろいろと行っていました。いきなり「これ二百部印刷して来い」と。(笑)。来年の八月に、ドイツから青少年合唱団、吹奏楽団が多治見市に来るんです。十日間くらい滞在して、市内の家庭でホームステイをしながら演奏をするというプログラム。その受け入れ計画を立てるの会議に参加しました。  
**佐野** 意見を聞いてくれた?  
**矢追** 日本 の家庭は忙しくて、十日間も確実に受け入れてくれる家庭は少ないだろうという意見が出て、前後半五日間ずつで受け入れ先を変えようという方向でまとまりました。

**全員** それはい話だね。  
**矢追** それから、イベントのチケット引換券を、若者らしい感覚で作ってくれと急に言われた

### ●目的意識と積極性が必要

**矢追** 後と同じ期間にインターンシップに来ていた立命館大学の三年生が、自分の考えている項目について質問書を用意し、市長との対談の時間を作っても

### インターンシップって何?

不況にもかかわらず、四年制大学を卒業した学生の3割が就職後3年で離職するという傾向が続いている。理由はさまざまであるが、なかでも注目しなければならないのは、就職して二、三年たつて、はじめて選んだ職種や会社が自分には向いていないことに気づくというものである。多くの大学生がアルバイトを通して職業にふれていくにもかかわらず、ミスマッチはなぜ起きるのか。

最近、ミスマッチが起きないようにするための方法として「インターンシップ」が活用されるようになった。インターンシップは、大学で習得した知識や理論を現実のフィールドで体験したり、一線で活躍する職業人との出会いや会話を通して実社会でのもの見方、考え方を学ぶだけでなく、将来の職業選択にあたっての能力や価値判断力を養うことを目的として制度化された。

インターンシップには、特定企業体験型、職業体験型、労働体験型、企業研修体験型、キャリアビルド型などのタイプがある。また、インターンシップを支援する制度には、東北及び岩手県内では、東北経済産業局による東北地域インターンシップ推進事業、盛岡大学生職業相談室(盛岡公共職業安定所)によるものがある。他に、自治体や企業が個別に実施するものもある。

総合政策学部においては、インターンシップへの参加を喚起してきたが、反応はいまひとつであり、いくつかの問題点が浮かび上がってきた。第一に、インターンシップ制度の趣旨という点で、授業との関連を再検討する必要がある。第二に、岩手県内では、インターンシップ制度を導入している自治体、企業の数だけでなく、総合政策学部に見合う職種の募集も少ない。第三に、募集期間が短く、他大学とも競合しているため、早い者勝ちになるという点がある。第四に、インターンシップ制度の趣旨からすると、全体に実習期間が短く、社会見学の域をでていない。

インターンシップ制度は大学教育において今後ますます重要性をおびてくるが、その趣旨を十分に活かすとなると、就職という問題を超越して、解決すべき問題が山積しているように思われる。





バッテリー村での小屋作り

## キャリアって何だろう？ ～キャリア形成研究会～

通称「キャリア研」と呼ばれる彼らは、もっぱら総合政策学部棟の演習室で活動している。キャリア研では今年度、全学の1年から3年1,600人を対象に、キャリアアップに関する意識調査を行った。実質的なメンバーは5人だが、たくさんの人たちの協力によって調査を実施し、約1,200人の回答を得ることができたという。

新設大学であるにも拘らず、比較的評判のよい(?)県立大学を名実ともに良い大学へと成長させていきたい。そんな思いから始まったキャリア研の目的は、県立大生の就職・キャリアに対する意識改革である。自分たちが行った調査が、ひとつの問題提起になってくれればいいと彼らは語る。彼らにとって「キャリア」とは積み重ねていく経験であるという。人生を真っ白なキャンパスだとすると、さまざまな経験が色々な絵の具になり筆になる。一生を通じてキャンパスに描く絵＝キャリアは一人一人違うけれど、自分の周りにはたくさんの絵の具＝経験の種類があるということに気づいてほしいと彼らは熱く語った。

今後の活動については、データ打ち込み、分析、そして調査結果をまとめた冊子の作成を予定しているという。自分自身が成長できるような良い大学になるように活動していくことが彼らの目標である。(お)

■キャリア研のメンバーからのメッセージ  
アンケートの作成や回答に協力してくださった方々に感謝しています。ありがとうございました。

## 映像魂！

～mecon (メディアコンテンツ研究会)～

「よし！君、(仕事を)手伝ってくれ」  
そんな第一声で始まった今回のインタビュー。お相手は「メディアコンテンツ研究会」略して「mecon」のメンバー、村田敏弥さん(3年)と、沢内雄哉さん(3年)である。初めての取材でいざさか緊張していたのだが、村田さんの第一声で急速に緊張はほぐれていき、最後まで先輩に学校生活を訊ねるような雰囲気インタビューは進んでいった。

meconの主な仕事は、総合政策学部のPR用の映像を撮影・編集すること。様々なところに足を運んで、大学や学部のイベントを撮影している。さんさ祭り、大学祭、夢ドリ、タウンミーティング等、単純計算で1ヶ月に1回以上は取材しているといふので驚きである。撮影された映像は編集され、大学の思い出として保存されるのだ。なお、その映像はWEB-MONTO (<http://www.poly.iwate-pu.ac.jp/monto/>)で公開されている。

何も知らない私は撮影よりも編集の方が難しいだろうと思っていたのだが、編集用のパソコンソフトを使えば、初心者でも簡単に編集ができるらしい。逆に、元になる映像が悪くてはどんなに編集してもいいものはできないので、撮影の方が難しいのだと村田さんは話してくれた。

撮影時に重点を置くポイントについては、「学部PRのようなものを撮る時は、キャンパスライフの楽しさを伝えるように考えて撮っている」と答えてくれた。後で編集して、「本当にこんなに楽しいわけないだろう！」と自分で突っ込みを入れたくなるようなこともあるとか。また、さんさ祭りの時にはいい映像を撮ろうと某ビル屋上に入り、警備員の人に追い出されてしまったこともあったらしい。そんなハプニングも後で考えるといい思い出になるようだ。

そのようにして撮影、編集、ナレーションと恐ろしく手回をかけて作った映像をじっと見てくれる人を見ると、とても嬉しくなると言う。作品がずっと残ることを考えると、見返りはなくとも物凄くやりがいを感じるとのこと。

そして最後に、とくに後継者が欲しいと真剣な顔つきで話してくれた。実働メンバーが少なく、しかも高3生で来年度は活動ができなくなる。このままではせっかく築いたものがなくなってしまい、とても惜しいとのことだ。最初に「手伝ってくれ」と言ったのも、あながち冗談ではなかったようだ。とにかく興味とやる気のある人で、総合政策学部であれば誰でもOKだそう。

今回の話を聞いて思ったのは、自分の知らないところで活動している人がいて、その人たちは自分とはやはり違う感覚で動いているのだな、ということだった。カメラに収め、編集するという一連の作業は苦しいが、そこに自分のやった痕跡が残る仕事であるのがとても羨ましい。だから私も記事を書き、自分の活動の痕跡を残せるようにがんばっていきたいと思った。(道)

## 現象を身近に感じたい ～川の水質調査を行って～

水には、「親水」という言葉があるように、やすらぎを与えてくれる魅力がある。また、「森は海の恋人」と言われており、山から流れてきた水は川となり、海へそそぐ。この自然のつながりを知ると、水を守るためには山や川、海、全ての環境を守っていかなくてはならないと分かる。水は物を媒介する存在であり、自然を物理的、生物学的、科学的に理解する上でも重要である。

今年の5月に豊島先生の指導のもと、松尾鉱山跡地とそこから流れる赤川、またその下流のpH値の測定と水生生物の有無の調査を行った学生がいる。松尾鉱山跡地から流れ出ている硫酸は、中和処理施設内で処理されているが、それでも処理施設からは、pH2の強酸性の水が赤川に流出している。これが、徐々に下流に流れていく過程で希釈されていくことは、本を読んだり何かの機会に知った人も多いと思う。しかし、本の中で学んだり、人から聞いたりして知ったことは、ただの知識でしかない。本当にそのようなことが起こっているのか、これを自分自身の目で確かめることによって、その現象をより身近なものにしてしまうという目的で行われたのが、今回の水質調査である。

調査の際に重要となってくるのが、自分の仮説を立てることと、簡便な調査器具を用いて多くの地点を広範囲にわたって調査することである。この調査によって、「pH値が高くなるにしたがって、生物の生息数も多くなる」という結果が得られた。そして「多くの生物にとって、水がどれほど重要であるかを実感できた」、「本や話の中だけで得た「現象」を、自分自身で調査し、確かめることで、自分に近づけることの大切さを知った」と、今回の調査に参加した菊池潤子さん(3年)と熊谷純子さん(3年)は話してくれた。

これからも、水に興味・関心のある人達が集まって、川や田んぼなど様々な場所で水質調査を行うことで、「現象」を身近に感じ、そこから自分なりに何かをつかめるような活動を行っていくそう。(ひ)



pH値を測定中

## 政策リサーチ・ネットワークって何だ？

他学部生A「それでさあ、総合政策学部っていったい何をやるどころなの？」  
総合政策学部生B「えっ？(沈黙)、色々なことやっているよ、ははは。」  
総合政策学部の学生ならば、誰でも一度はこのような経験をしたことがあるだろう。他学部生との会話だけに限らず、親兄弟、母校の先生など、総合政策学部以外の人々に対して、「総合政策学部とは○○をやる学部である」と一言で説明することに難しさを感じるのは少なくないと思う。

「総合政策学部とは、複雑な現代社会の諸問題を様々な学問分野との連携で解決するという理念を備える学部である」という抽象的な説明をしても、具体的に何をやっているのかは相手には伝わらない。結局は履修科目を羅列してその場を切り抜け、曖昧な説明に終始するのである。

しかし、いつまでもこれで良いのだろうか。曖昧な説明ではなく、もっと説得力をもって自分が学んでいる学部のことを伝えたい。得てして悩み所を失いがちになる「総合政策学部」に自信を持ちたい。それは多くの総合政策学部生の願いであるはずだ。

このような学生の悩みを解決するために、今回紹介する政策リサーチ・ネットワーク(Policy Research Network - PRN-)である。学部内での学生の活動の広がりを生み出す学問連携のために、それらを繋ぐ「ネットワーク」が必要不可欠で、それに必要な情報交換や活動を支援する「場」、それがPRNなのだ。

現在、このPRNを利用して、「地域の活性化」というテーマに関心をもつ学生が集まり、滝沢川の現状把握をするために地域デザイン構想の冊子を読み進めているグループがある。また、「政策学を学ぼうにも、専門用語が難しく理解できない。」そのような人達をターゲットとした、政策学の用語集を作成している集まりもある。

この例のように、総合政策学部の学生には「ココの繋がり」をメインとした活動が今後いっそう求められるだろう。「総合政策学部は自分から動き出さないと何も始まらない」とよく耳にすることが、そのチャンスを増やすための「場」、それがPRNなのだ。PRNを利用することによって、自分の中での「総合政策学部」の本当の意味を見出すことができるだろう。(く)

# 総政

Sou Sei

# 政

## インターンシップで実社会を体験！

とも終わり、いよいよ待ちに待った夏休み。2ヶ月もある休みの過ごし方、それぞれがそれぞれだが、その半分にあたる1ヶ月間にインターンシップ体験をした学生がいる。

インターンシップとは、「学生が在学中に企業などで就業体験を行うこと」で主に3日とっては、その後授業に、より意欲的に取り組めるようになったり、書き真剣に考える手助けになったりすることが期待される制度だ。

ニューをした佐藤泰貴さん(3年)は、8月の初めから1ヶ月間、県内のインターンシップを体験した。その内容は、実際に現場へ同行し、ニューを調べたり、カメラの撮り方や編集の仕方を教わったりするものだった。

は華やかなイメージがあったが、実際の現場は意外と地味な仕事ばかりだ。彼は話してくれた。「原稿を書かせてもらったが、新聞記事の原稿とは違いに補足的な説明を加えるだけだったり、キャスターが読むものなので、長い文章、難しい文章を使えなかったりした」などと、苦労した面も多そうだ。しかし、「社会人の一般常識についても勉強になったし、大学でできないことをした」と、このインターンシップを振り返って前向きな感想を述べた。

こうした体験が、将来やりたいことを見つかけたり、大学へ来ている意味などよりするきっかけになる。彼の話を聞いて、大学は、自分で(きっかけを)行動を起こさなければ、何も起こらないのだということがわかり、私も、これからの大学生活を考えたい気持ちになった。

インターンシップに興味があれば、積極的に参加してほしいと思う。(歩)



只今ミーティング中

## 「仲間に入りたい！ 詳しい情報が知りたい！」 連絡先はこちら (アイウエオ順)

- |   |   |
|---|---|
| ■キャリア形成研究会<br>佐藤 泰貴 (3年) g041x052@poly.iwate-pu.ac.jp                                   | ■熱井会<br>清水 健一 (2年) g041y053@poly.iwate-pu.ac.jp     |
| ■水質調査<br>菊池 潤子 (3年) g041x024@poly.iwate-pu.ac.jp  | ■バッテリー村<br>及川 きみか (4年) g041w016@poly.iwate-pu.ac.jp |
| ■政策リサーチ・ネットワーク<br><a href="http://www.policy21.jp/PRN/">http://www.policy21.jp/PRN/</a> | ■mecon<br>村田 敏弥 (3年) g041x099@poly.iwate-pu.ac.jp   |
| ■総合政策学部自治会<br>高地 一雅 (2年) g041y062@poly.iwate-pu.ac.jp                                   | ■野鳥調査<br>佐々木沙都香 (3年) g041x042@poly.iwate-pu.ac.jp   |
- このページの編集スタッフも募集しています!!
- MONTO編集  
尾形 真紀子 (3年) g041x016@poly.iwate-pu.ac.jp

## 編集後記

この学生ページの編集をして、早3年。時々、「どうしてこんなに面倒なことをやっているんだっけ？」と考えつつも続けてきたところに、ついに「高校生の時にMONTOを読みました」と言う新人生徒！ 責任を感じずにはいられません。こんなに嬉しいことはないです。

今回取材を受けた、与えられたカリキュラムや場所といったものにこだわらず、学生自身で考えて何らかのアクションを起こそうとしている人々です。新しいものを作るのも大変ですが、続けていくのはもっと大変。しかし、それも今ここでしか味わえないものだと考えて、元気出していきましょう！

■編集者  
尾形真紀子 石川淳子 及川歩美 大前秋朝 大和久ひかり 岡本智子 栗山隆志 佐藤道尚 行川理香



「研究最前線」

# 岩手山火山活動に関する 地域防災総合研究



**元田良孝**  
総合政策学部教授、博士(工学)  
建設省(現・国土交通省)大阪国道工事事務所  
長などを歴任、1998年4月より現職。  
専門は交通工学、防災工学。  
『防災工学』(森北出版)ほか交通や防災に関する  
著書・論文多数。

## 岩手山は 生きている山

岩手山山頂から直線で十三キロの距離にある国立大学。新入生を迎えるオリエンテーションでは「災害発生時の時にはどう対処するか」というテーマで防災の話も組み込まれている。キャンパスから日々仰ぎ見るこの山は「活動的火山及び潜在的爆発力を有する火山」に分類される、いわゆる活火山なのだ。

県立大学開学の一九九八年、岩手山西側で火山活動が活発化。周辺四町村で入山禁止の措置が取られるなか、九月三日の南西部を震源とする地震により、地元での危機感はいよいよ高まった。火山予知連絡会の「火山活動は継続化し長期化の可能性がある」との報告を受け、東北大学や秋田大を始め、全国からの研究者が来県。噴火予知システム確立等に向けた観測活動が進められていった。

## 防災の総合研究で 地域貢献を

県立大学には火山噴火そのもの

## 多様なテーマが 形成するプロジェクト

総合政策学部では主に四つのテーマに添って調査が進められてきた。

☆山麓地帯の地形・集落の立地状況等の現地調査を進め、一方で周辺の地図情報を統一化。用水路や用水路と土石流の発生しやすい沢との位置関係を検討し、被災の影響を想定。

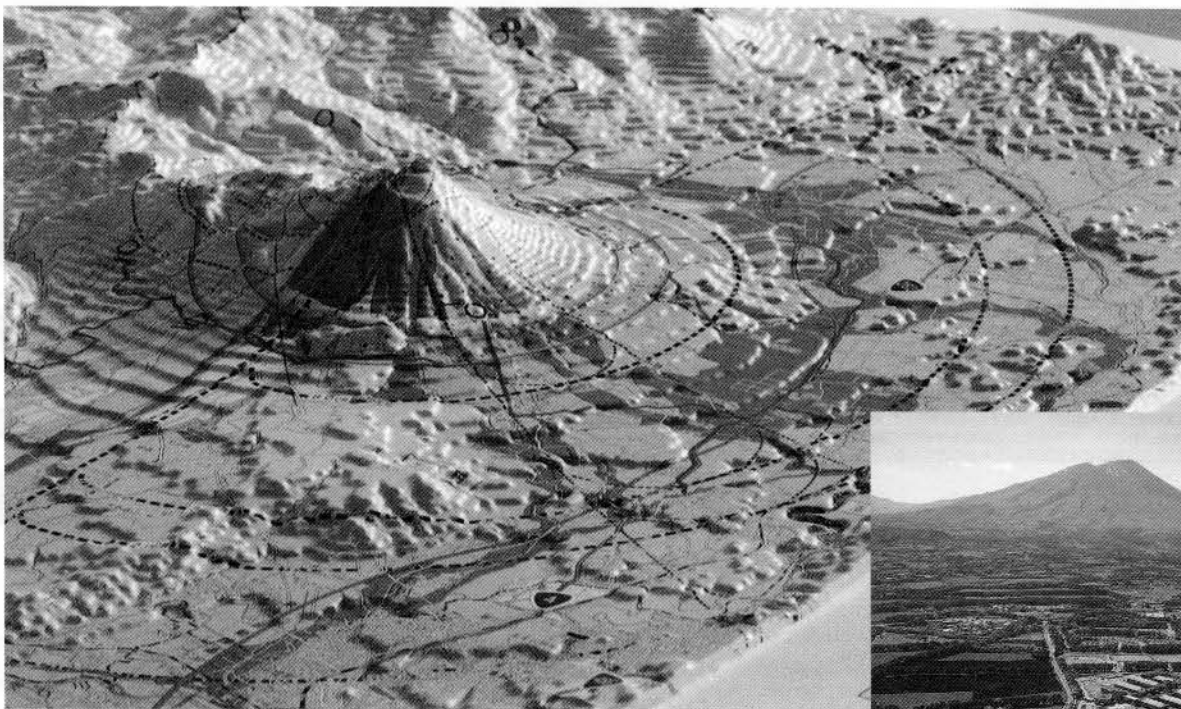
☆一八八八年に噴火した磐梯山の資料収集や現地の聞き取り調査を基に、噴火の被害や住民の避難行動を想定。危険に対する認識の必要性を確認。

☆岡田六町村を対象に、噴火への備えの有無・火山の生活への影響・防災マップの理解等についてアンケート調査。また避難訓練時の意識調査により避難行動を分析し、防災対策の課題や改善点を考察。

☆火山活動活発化が山麓のベンション経営にどう影響したかを聞き取り調査。また簡単な経済モデルを作成して情報が観光に及ぼす影響、いわゆる風評被害を推定。

他学部でも◇被災者の治療や心の支援◇災害発生時の行動や心理◇災害対策における福祉の危機管理◇非常時の情報通信手段など多岐にわたる取り組みがなされた。看護学部・福祉学部では学生も加わり災害ボランティア体験を通して調査が進められたケースもあった。

この総合政策学部から呼びかけが、看護・社会福祉・ソフトウェア情報の四学部すべてに届き、賛同の声が集まった。一九九八年十一月、全学部あけて防災に関する研究会がスタートした。翌年「文部省科学研究費」と「岩手県学術研究振興財団」の三年間にわたる研究助成の対象となり、首藤教授を代表とする「岩手山火山活動に関する地域防災総合研究」のプロジェクトが本格的に始まった。学外からの参加者も含め五十四名が九つのサブグループを結成、他大学にはみられない多角的な調査分析を進め、画期的な取り組みとなった。



岩手山を立体地図で見ると……

岩手山はキャンパスのすぐ近くだ！

## 生活の中の数理 ——ナンバーズを考える その1

渡辺隆裕

皆さんはナンバーズという宝くじをご存知ですか？ナンバーズ3は3桁(ナンバーズ4は4桁)の数字を自分で選択してくじを買い、抽選でその数が選ばれど賞金が当たる宝くじです。

ナンバーズは物理的な機械で全くアタラメに数が選ばれる乱数です。当選番号を予測することはできません。しかし、若くはナンバーズの当選番号を予測しようとする「必勝本」が多く出回っています。実際に過去の当選番号の系列を調べてみると、何らかの傾向があるように見えて番号が予測できるような気がしてきます。これを考えることで、乱数や確率に関する

人間の認知について理解を深めることができます。

必勝法が一番単純なパターンは、頻度の多い数と少ない数を調べるものです。ここでナンバーズ3の20回目までの当選番号において、どの数字が何回出たかを調べてみます(表1)。これを見ると、6が1回しか出ていません。これを見て「6は出にくい」と単純に考える人はあまりいないようです。むしろ「この後で6が多く出なければ、6の出現比率は少なくなり、全ての数が万遍なく10分の1で出ることにならない。だからこの後は6が多く出るのははずだ」と考える人がいるようです。この考え方は正しいのでしょうか。誤って

いるとすれば、どこがおかしいのでしょうか？

そこで21回目から600回目までの1740個の数の出現回数と出現比率を見てみます。すると6の出現回数は162個(平均は174個)、出現比率は9.3%であり、6の出現比率はむしろ低くなっています。「この後は6が多く出るのははずだ」という考え方は正しくはなかつたことがわかります。(実際には20回目の後も32回目まで6が1回も出現しない)また同様に6が出にくいわけでもないことが分かります。(4や7の方が出現確率が低い)

しかし20回目までの6の出現比率が1.7%であったのに対して、600回目までの合計の出現比率は9.1%になり10%にぐっと近づいていることが分かります。数の出現比率が10%に近づくと、21回目から600回目までの数字の個数(サンプル数)が多くなり、20回目までの影響が無視

できるほど小さくなったからで、6が多く出たからではないのです。

6に限らずすべての数字の出現比率を見てみると、20回目までは1.7%から16.3%と幅があるのに対し、600回目になると9.1%から11.4%と、10%の周りに近づいていることが分かります。このように実

際の出現比率が真の出現確率に近づくまでには、多くのサンプル数が必要となります。もっとも一般的な必勝法である「どの数字の後にどの数字が出やすいか」といった考え方も同様であり、このような考え方は番号は予測できないことを示しています。

表1: ナンバーズ3における数字の出現回数と出現比率。

数字	出現回数			出現比率		
	1-20	21-600	合計	1-20	21-600	合計
0	5	176	181	0.083	0.101	0.101
1	7	166	173	0.117	0.095	0.096
2	11	184	195	0.183	0.106	0.108
3	5	178	183	0.083	0.102	0.102
4	7	156	163	0.117	0.090	0.091
5	5	185	190	0.083	0.106	0.106
6	1	162	163	0.017	0.093	0.091
7	6	156	162	0.100	0.090	0.090
8	4	180	184	0.067	0.103	0.102
9	9	197	206	0.150	0.113	0.114
合計	60	1740	1800	1.000	1.000	1.000

※1-20は1回目から20回目まで、21-600は21回目から600回目までを表す。

# 中国・河北省社会科学院と協定締結 ——西澤学長が訪中して

岩手県立大学総合政策学部の環境及び地域分野の教員たちは、これまで中国、タイ、ネパールの農村部や山間部の社会変動と環境問題について調査研究を行ってきました。なかでも中国では、河北省社会科学院との共同研究という形で調査が進められてきました。河北省社会科学院というのは、河北省政府(日本でいえば県庁に当たる)直属の研究機関で、省政府の政策立案に寄与することを目的に設立されている組織です。共同研究を進めるなかで、岩手県立大学と河北省社会科

学院の双方の研究者間の友好関係が深められ、今後いっそう交流を促進するために、学術交流の協定を結ぼうという気運が盛り上がりました。

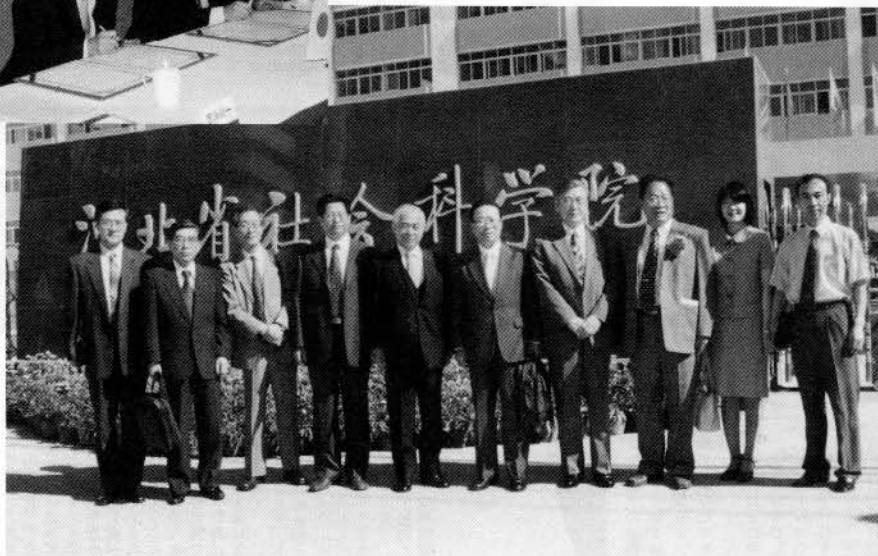
今年の5月、河北省社会科学院の創立20周年の記念行事の際に、岩手県立大学の西澤学長をはじめとする友好使節団が訪問して調印式典が開催され、西澤学長と先方の李仲華院長との間で協定書への調印が行われました。

この協定にもとづいて、10月には、河北省社会科学院から2人の研究者が県立大学を訪れて、日本及び岩手県内の経済情勢について研究し、また地元企業を訪問して調査を行うことになっています。

岩手県立大学として外国の研究機関と学術交流の協定が結ばれるのは、これが初めてです。協定は、大学全体と社会科学院全体との間のもので、そのきっかけを作ったのは総合政策学部の中国における研究活動であり、私たちは岩手県立大学の国際交流に先導役をはたすことができたことを、とてもうれしく思っています。



西澤学長と李仲華院長による調印式



河北省社会科学院での記念写真。中央が西澤学長

三年の区切りを経て次のステップへ  
調査結果は折に触れ関係市町村の防災関係者へ報告。またマスコミを通じて発表されてきた。今年度は活動の最終年度。一般の住民に、より身近な研究成果をまとめ発表することで成果の還元を図ろうとの計画が進行中だ。また、来年度以降もサブ

グループごとに独自の研究を続ける合意がなされている。  
岩手山防災は地域の大きな課題。地域との連携を掲げる県立大学にとっても重要なテーマとなった。ひとつのテーマの各分野の専門家が様々な角度からアプローチする試みは他大学には未だ見られない。  
「首藤教授が最初と考えられ

たのは、刻々と変化する火山の状況と合わせリアルタイムで情報を分析し、災害の危険にどう対処すべきかを地元に戻して行くことでした。地域密着の大学として防災を考えた住民の生活を支援する目的はある程度達成できたと思います」と元田教授は言う。

火山との共生のため  
正確な知識と  
防災への深い認識を  
今年七月、三年ぶりに入山規制が緩和され東側からの登山者が頂上に立った。しかし岩手山の火山活動が終息したわけではない。自然災害を予測しコントロールすることは不可能でも、噴火した場合の備えがあれば被害を最小限におさえることは可能だ。研究機関から発信される防災への啓発は、行政の政策立案に生かされ住民の意識を深める道に繋がらるだろう。多彩な研究陣による学問探求のネットワークを地域貢献に結びつけるこのプロジェクトを通じて、地元密着を掲げる県立大学の研究姿勢・存在意義もうかがえるようだ。

害を最小限におさえることは可能だ。研究機関から発信される防災への啓発は、行政の政策立案に生かされ住民の意識を深める道に繋がらるだろう。多彩な研究陣による学問探求のネットワークを地域貢献に結びつけるこのプロジェクトを通じて、地元密着を掲げる県立大学の研究姿勢・存在意義もうかがえるようだ。



本学部の古川教授がコーディネーターをつとめた

## 竹中大臣ら県大で熱弁 —タウンミーティングin岩手—

平成13年6月17日(日)、本学講堂を会場に、「小泉内閣の国民対話」の一環として「タウンミーティング・イン・岩手」が開催された。本学部の古川浩一教授によるコーディネイトのもと、経済財政担当大臣・竹中平蔵氏をはじめ4人の大臣・副大臣と、大学院総合政策研究科修士課程2年の及川立一さんから7人のパネリスト、300人の岩手県民が参加した。客席には、本学部学生の姿も多数みられ、地方分権推進などの構造改革に関する対話を真剣に聞き入っていた。

ノックに反応するヤバイティションの陰から四人の顔がポツコリ覗くのがなんとなくユーモラスだ。教室はほぼ三分の二の部屋には個性あふれる知の宝島が隠れていそうで、「いざ探検」と心は躍る。それぞれに区切られた一画を互いに覗くことにはないという神聖にして犯すべからざるスペースに踏み込むと、そこには水、宇宙、日、土にイメージが重なる孤島があった。奥の窓際は棚から床まで雪崩れるように積み重ねられた書籍・資料が圧巻。夏の日の幻影だったのか白く飛沫をあげる大滝を想ってしま

いう助手の皆さん。それぞれの机に向かうと見えないカプセルが閉じられて、個に没頭する空間が生まれるのだから。身近くの共有テーブルにはチョコレートなどが置かれているもの全員揃ってお茶を飲み、くつろぐ時間はあるものではないか。ロンドンの学会土産・十八年物スコッチもまだ開封されず鎮座したまま。出退勤時間もまだまだだから気のついた人が「ヒー・メーカー」のスイッチを入れ、後片付けをする。阿吽の呼吸で協力態勢が整っているらしい。映画と古書店めぐり、ピアノ、男声合唱、ピオラと趣味もさまざま個性もとりどりの四人。研究に邁進する若いエネルギーゆえか助手室の室温はちよつと高目のようだ。



写真右から山田、佐野、野崎、堀籠

## おじゃまします 「総合政策学部助手室」の巻 四つの島に宝探しに 出掛けたい

佐野嘉彦 堀籠義裕  
野崎道哉 山田佳奈  
(五十音順)

想曲が聞こえてきても不思議ではなさそうだ。中央の窓側は部屋全体に入りこむ日差しを遮らない心地よいのか本棚にも空間をつくり窓外から緑の風が吹き込んでくる。  
入り口近くの窓側は考え抜かれた動線が芸術的な配置。沖繩の手織り物もパソコンの側に飾られその風土を偲ばせる。  
「この部屋に入ると仕事モード・やる気モードに切り替わり気持ち良くなる」といふ言葉が響く。

●【MONTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース Iwate Prefectural University ●第6号 2001年(平成13年)10月27日 ●発行：岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193岩手県滝沢村滝沢字果子152-52 代表TEL019-694-2000 学部019-694-2700 FAX019-694-2701(学部事務室) 印刷/株式会社隆印刷 TEL019-641-8000

# MONTO

岩手県立大学  
総合政策学部ニュース  
Iwate Prefectural University  
第6号2001.10.27  
このニュースは100%再生紙を使用しています。

《MONTO WEB版》URL  
http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/monto/  
\*岩手県立大学のホームページ http://www.iwate-pu.ac.jp/から  
総合政策学部をクリックして、次にMONTOをクリックしてもアクセスできます。

## キャンパスの鳥たち・2

# ヒヨドリ

山井正敏教授

春秋の渡りの時期の朝方に、この滝沢キャンパス周辺のマツ並木や山沿いの林のすぐ上へ、群れをなし液状に上下しながら飛翔する中型の野鳥が目につきます。これがヒヨドリです。ピーヨとかピーヨなど大きな声を出しますが、この声そのものが鳥名の由来です。源義経が源平合戦の際に神戸のひまり越入の坂落として勝利したその地名からも分かるように、秋には全国各地でその年生まれの若鳥を伴う大群が時や海峡を通過して南下します。

全身グレイで、頬は赤黒くお腹に白斑があり、地味な鳥です。大学周辺でも、カラマツ並木や隣の野鳥観察の森で沢山繁殖しています。スズメヒヨドリ科に属し、分布は日本全土及び台湾で比較的狭い範囲です。四月下旬、構内の並木に咲く桜(フメイヨシノ)に少数の群れが集まって盛んに花をつついていきます。たまに花びらを食いちぎる

ので花を食べているように見えますが、本当の目的は蜜を吸うことです。同じ目的で渡り途中のメジロも集まっています。この二種はわが国の野鳥の中でも代表的な花粉を媒介する鳥です。

国内では、主に原山や市街地に繁殖し、ブナの原生林にはあまり住みません。このため人為的に入った環境を指標する野鳥とも言えます。昭和四十年代前半までは東京の都心部では繁殖していませんでしたが、後半になって侵入してきて今はどこにも見られます。こうした野鳥を都市化鳥といえます。近年、世界的にチョウゲンボウ類、ハヤサザ類など小型の猛禽類が都市内に侵入し繁殖する例が多くなっています。鳥類の一部も都市化鳥であり、野鳥の適応力の強さを示しています。

写真のヒヨドリは、初冬の初雪の日に餌を求めてガマズミの実を食べに来たものです。ご覧



ガマズミの実を食べに来たヒヨドリ (鈴木祥信氏撮影)

のようにガマズミの実も赤く野鳥が目立ちます。何故、わざわざ色を目立たせて野鳥に食べられてしまうのでしょうか。大事な実を野鳥に食べられては、子孫が残せぬはずなのに、

実際は、この実の柔らかく美味い部分はヒヨドリが消化してしまえば、大切な種子の殻の部分は固く消化されずに捨てられるのです。口からフンと一緒に出す場合があり、フンは実を飲み込んでしばらくしてから排出されるため、種子は食べられた場所から遠くに運ばれます。野鳥に食べられた種子の方が発芽率がよくなり、親木の下に生えるより速く、運ばれた方がその後の成長がよいことがかなり多くの場合が言えます。つまり野鳥は、樹木の分散と生育の手助けをしていることになり、

繁殖期のヒヨドリは、木の茂みに隠れてお椀形の巣を造り、数羽のヒツを育てます。ヒツの餌は、主にガヤヤなどの昆虫やクモ類ですが、サクヤクワの実なども運んで食べます。このように森林では、動物と植物の持ちつ持たれつの興味深い関係が見られます。

## 県大モール階段下の怪談事件の謎

モントン事件簿(その6)

県大モール中央坂の階段に腰を下ろして語り合っていた学生たちが、地下から聞こえる奇妙な物音に驚愕するという事件が連夜発生した。学生たちは階段の地下にお化けがいるのでは、とこの怪談に信じておりました。ご存じのようにこの階段は、毎年、わが学部の新一年生が、全員集合し恒例の記念写真を撮る大事な場所でありました。

その階段下の怪談を説明せんとする現場に赴きました木官・鏡形モントン警部は深夜、階段下に、まさにカランコロンと怪音が響くことを確認したのであります。日ごろ学内をパトロールし、構内を熟知している本官は、階段下怪談事件捜査のため、ただちに建物に引き返し、わが学部一階通路奥に向かいました。総合政策学部から看護学部へ行くには、戸外の県大モールか、二階の空中回廊のいずれかを通るのですが、実はほとんど知られていない、もう一本の近道、地下道がありまして、

本官はまずわが学部前一階通路を奥へ直進し、その突き当たるすぐ手前で右折、



高台部分の下に延長して入り込んだ場所にあるこの地下の通路に響かして怪音を発生させつつ歩いてきた犯人は、こたばもモントン前号同様、我が大学に住みついた妖怪「座敷わらし」氏なのであります。

わがキャンパスに永住を許された彼は、旅に出る代わりの散歩に最適な場所として、ほとんど人の通らぬ地下回廊を見つけた。たびたび歩いてきたとのことでした。人目につく県大モールや空中回廊を避けたのだそうですが、地下を下駄で歩くのでは音がしますので、本官は足袋(たび)を氏に贈呈し、以後またび怪音が聞こえなくなりました。もちろん、その足袋は地下足袋であります。

なに? 昨今の学生諸君のなかには地下足袋どころか足袋もご存じない人がいるも。そのたびに説明が必要とは、イササカクたびれますな。

●編集後記

▼MONTO第6号を志願集スタッフがこの四月から編りまして、今後は、この第6号全体の読者へのメッセージは、「大学で学びながら、大学の性に導かれ、活動してみよう」という点からスタートします。▼昨年から、四・五面の学生自身による記事には、本学学生によるいきいきとした様子や紹介されています。このような活動は、一面記事にあ

### 私のパソコンライフ 岡田寛史

どうしてもWindowsに馴染めなかった。そこで開学年度から、BTROONという自家OSを使い始めた。短所も多いのだが、これほど馴染むOSは初めてだった。今では仕事の最前のパートナーとなっている。

第一の魅力は、独自の長尺なファイルシステムにある。通常のOSでは、ファイル/ディレクトリ/アイコン/リンクがそれぞれ別物として区別されるが、BTROONでは別がない。一つのファイルがファイルであり、同時に他のファイルも置くファイルにもなる。別のファイルも置くこともできる。しかも、これらのファイルの自由な配置がそのままでリンク構造を形成する。簡単に、単なるファイル構造(分類)による管理を超えて、ファイル同士が直結するネットワーク構造を構築できる。それは思考プロセスそのままのファイル構造による管理。その良さは、誰よりも早く気が付いた。これが他のOSには見られない最大の理由である。

第二の魅力は、心と財布と環境にやさしい。とにかく動作が軽く、安定している。すでに数回のバージョンアップを経験したが、いまだに三年前のバージョンで快適に動作し、ハンダ経験も皆無に等しい。新製品に踊らされることなく、心豊かに暮らせる(のが、いやや)。

第三の魅力は、使える文字が多く国際化時代にマッチしていること。人名用や旧字体、点字、アジア圏を含む世界各国の文字など、約十七万文字が使用できる。これは、個人的には、この魅力的なOSだと思ってしまう。実は思いっきり知られていない。何しろ自分以外のユーザーを学内はおろか他国では存在がほとんどない。同好者は、限られている。一度使ってみませんか?

### 第六回 お宝拝見! 日本酒のラベル 蔵元 杜氏 蔵人のチームワークの結晶 吉野 英岐

秋の深まりとともに、酒の美味しい季節がやってきた。居酒屋の小料理屋には、数々の名酒の酒肴を揃かに待っている。

昔では大時鐘、純米、山廃造りなど酒の品質や製造方法を表す言葉が並び、品書きには越乃寒梅、久保田、天狗舞、時鐘など有名地酒ブランドが並んでいる。旨い酒を求めて、全国の有名銘柄を追いかけ、酒飲みもいる。それでも、酒のラベルをじっくり見る客はどれだけのだろうか。

酒瓶に貼られているラベルは酒の名のみのみならず、その原料、製法、成分、製造元(蔵元)、製造責任者(杜氏)など記載されている場合もあり、いわば酒の履歴書でもある。このラベルを集めるのが、かれこれ二十そこそこであるが、いわゆる大手のメーカーのラベルは一つもない。というよりも直接、蔵元を訪れて購入した銘柄がほとんどである。日本酒は地場産業の最たるものであり、全国津々浦々で製造されている。その多くが手作りで製造さ

れ、おり、同じ銘柄でも毎年毎年微妙に味が違う。出荷され、製品となった酒のラベルには、蔵元・杜氏・蔵人のチームワークが結晶となって凝縮されているのである。

日本酒は郷土の米と水と職人の技の結晶であり、芸術品とも言えるほどの美しさがある。林の夜長、酒のラベルを眺めつつ、その酒が飲める。それを眺めつつ、その酒が飲める。それを眺めつつ、その酒が飲める。それを眺めつつ、その酒が飲める。